

Title

# 現代日本の養蚕業における供養精神——人間と蚕の関係へのまなざし

Name

小澤 茉莉

## 抄録

近年国内外で食肉や毛皮といった人為的な殺生を伴う業界に対する批判が顕在化しており、人間と動物の関係自体が再考されている。文化人類学においては、人間と動物間のみならず多種との関係を捉える「マルチスピーシーズ民族誌」が注目されている。すなわち、人間中心主義を超える分析枠組みとして、これまでの二分法的な関係ではなく、人間と多種との相互関係をまなざす新たな潮流が生まれているのだ。他方、人間という存在に依拠して展開されてきた脱人間中心主義の議論自体に対する批判も見られることから、今後文化人類学において、フィールドワークを通していかにして人間が他種をまなざしているのかを精緻に調査する必要がある。

そこで、本研究では、人間と他種の実態およびいかにして人間が他種を認識しているのかを調査するため、これまで数千年にわたって生糸生産のため蚕を育て、繭を生産する養蚕という生業と、養蚕農家の蚕に対する供養精神に注目する。具体的に、第1章では文化人類学における人間と動物の関係をめぐる議論や、マルチスピーシーズ民族誌という分析枠組み、本研究で焦点を当てる供養精神について整理する。第2章では、養蚕の具体的な工程について記すとともに、今日に至るまでの養蚕の歴史や、養蚕農家たちの中で信仰されてきた養蚕信仰について記述する。第3章では、本研究における調査対象や調査方法等について、続く第4章では関東甲信越地方の8名の養蚕農家を対象とした半構造化インタビューの結果を記す。そして第5章では、本研究のインタビュー結果を踏まえたうえで、今日における供養精神の実態および人間と蚕の関係について考察と分析を行う。最後に、結びとして本研究全体をまとめ、今後の研究の展望について記述する。

キーワード：養蚕、供養、マルチスピーシーズ民族誌

Title

## **The Spirit of *Kuyō* in the Current Japanese Sericulture Industry: Focusing on the Relationship between Humans and Silkworms**

Name

**Mari Kozawa**

### **Abstract**

In recent years, criticism of meat, fur, and other industries that involve the killing of animals has emerged internationally, leading to a reconsideration of the human-animal relationship. Cultural anthropology has been drawing attention to “multispecies ethnography,” which captures not only the relationships between humans and animals, but also those among other species. Moreover, as an analytical framework that transcends anthropocentrism, a new trend in cultural anthropology aims to determine mutual relationships among various species, rather than just dichotomous relationships. On the other hand, since there has also been criticism of anthropocentrism itself, which was developed based on the existence of humans, cultural anthropology should investigate in detail through fieldwork how humans view other species.

This research focuses on sericulture, which for thousands of years has raised silkworms and their cocoons for producing raw silk, and the mourning spirits called *Kuyō* of sericulture farmers. In addition, it investigates the relationship between humans and silkworms, and how humans perceive them. Specifically, this paper describes in detail the sericulture process, its history, and the *Kuyō* beliefs among sericulture farmers in Japan. Then, it analyzes the current state of the spirit of *Kuyō* and the relationship between humans and silkworms based on the results of interviews with sericulture farmers. Finally, in the conclusion, the research is summarized, including prospects for future research.

Keyword: sericulture, *Kuyō*, multispecies ethnography

## 1 他種をまなざす供養精神

### 1.1 文化人類学が捉える人間と動物の関係——「他種」へのまなざし

近年、国内外で肉食や毛皮産業といった人為的な殺生を伴う産業に対する批判が顕在化している。実際に、欧米諸国を中心に、動物性の原料を避ける完全菜食主義者の存在が注目され、毛皮の生産や販売を禁止する動きも見られるなど、人間と動物との関係自体が再考されている。

筆者の専門領域である文化人類学においても、人間と他種間に着目した議論が活発に展開されるとともに、両者の関係を再考する理論的枠組みが注目されている。これまで動物と人間をめぐる人類学的研究の分析枠組みは、構造主義や象徴論的なアプローチで展開されており、自然（動物）と社会（人間）はそもそも異質なものであるという西洋近代的な二分法を基盤とした分析枠組みは今日においてもほとんどそのまま踏襲されていると指摘されている（シンジルト, 2011, p.133）。他方、近年こうした二分法的分析枠組みではなく、より広範囲な多種との関係を包括的に捉える試みとして、「マルチスピーシーズ民族誌 (multispecies ethnography)」という人間と他種、さらにウイルスや機械、モノ、精霊、地形などを含むものとの絡まり合いから人間とは何かを再考する分析枠組み（近藤・吉田, 2021, p.13）が注目されている。例えば、人類学者のアナ・チンは、マツタケという商材をテーマに、マツタケの市場を取り巻く人々や自然環境などあらゆるアクターとの相互関係について調査を行った（Tsing, 2015）。また、文化人類学者のアレックス・ブランシェットは、米国の工業型養豚における生産者と豚の関係に着目した研究を行い、養豚業の生産現場におけるフィールドワークを実施し、養豚業で働く労働者と豚の関係やそれらを取り巻く工場畜産の実態を明らかにした（Blanchette, 2015）。このように、文化人類学において、人間と多種の関係を対象とした研究が各地で展開されているのである。

こうした多種をまなざすマルチスピーシーズ民族誌が現れた背景について、宗教民族学者の山田仁史は、自文化中心主義やヨーロッパ中心主義、そして人間中心主義を乗り越えようとする精神や、人新世という時代において人間と他種との関係を捉え直す危機意識の萌芽、そしてクローンや遺伝子操作など科学技術の進歩によって種そのもののあり方、生命観や生命倫理の揺らぎがあると指摘する（山田, 2016, p.126）。加えて、文化人類学者の奥野克巳によると、マルチスピーシーズ民族誌の基礎にはあらゆる生物種が他種や環境との関係を通じて生きているという「絡まり合い (entanglement)」という重要な考えがあり、二者における相互作用ではなく、多種の絡まり合いに注目することで、自然／文化の二元論の図式を乗り越えることが視野に入れられている（奥野, 2021, p.47-48）。このように、マルチスピーシーズ民族誌という文化人類学における分析枠組みを通して、人間と動物を分けたうえで理論を展開するこれまでの二分法的思考自体を批判的に見つけ、人間と動物のみならず、それらを取り巻く多種の存在を内包した形でそれらの関係を捉え直す動きが高まっているのである。

他方、マルチスピーシーズ民族誌に対する批判も見られる。人類学者の久保明教は、マルチスピーシーズ民族誌に関する研究を行う近藤祉秋との対談において、マルチスピーシーズ民族誌の背景にある脱人間中心主義について、そもそもこの脱人間中心主義は人間という概念に依拠しており、人間中心主義的な発想や実践を俯瞰して批判できるという前提が何によって正当化されているのかを指摘すると同時に、日常的な実践において「人間なるもの」への依存がいかん展開され、そうしたものから外れる可能性がどのように抑制されているのかを具体的に検討するという方向性について言及している（久保・近藤, 2022, p.38-39）。こうした批判を踏まえると、マルチスピーシーズ民族誌は脱人間中心主義的な分析枠組みとして他種との関係を射程に入れているものの、依然として「人間」という存在に大きく依拠しているゆえ、「他種」という捉え方自体が人間中心的であるとも言えるだろう。それゆえ、

このような枠組みの前提として、これまで行われてきた人間と他種との関係を調査するのみならず、人間がいかにして他種をまなざしているのかを、フィールドワークを通して精緻に捉える必要があるのだ。

## 1.2 養蚕と供養精神への着眼

以上の文化人類学における潮流を踏まえ、人間と他種の間を捉えるうえで筆者が注目するのは、人間と完全家畜の昆虫である蚕によって成り立つ養蚕業という生業である。養蚕とは、生糸生産を目的とする蚕糸業において原料の繭を生産する工程を意味する。蚕は紀元前より数千年もの時間をかけて人間によって品種改良されてきた家畜である。すなわち、数千年に渡って品種改良を繰り返し、完全家畜化された蚕は、人間の手を介さなければ生きられず、人間という存在に大きく依存する生き物である。また、生糸生産のため育てられた蚕は、繭を作った後に製糸段階で蛹のまま茹でられてしまい、その命を全うすることができない。

このように蚕の死を伴う生業において、蚕に対する供養精神は日本各地で供養碑や供養塔という形で体現されてきた。例えば、1897（明治30）年に建立された柏木沢の蚕影碑（群馬県高崎市）について、降雹によって桑畑に大きな被害があり、桑の葉を餌とする蚕の飼育が困難となったため、村人たちが相談し、止むを得ず丘に蚕を埋め、蚕影山大神を祀って蚕の霊を慰めたという背景がある（高崎市文化財保護課，2023）。また、1934（昭和9）年に建立された蚕霊供養塔（長野県岡谷市）は、その当時世界不況の影響で製糸工場の多くが休業や倒産する中で、製糸発展のために犠牲になった蚕の霊を慰め、蚕神を祀り蚕糸業の発展を祈念するため、製糸業関係者が中心となって建立された（岡谷市観光協会，2023）など、生き物である蚕の殺生に直面する生産者が主体となって蚕への供養精神を体現してきたのである。

こうした供養精神について、古来日本において供養は人間のみならず動物や草木、針などの動植物や無生物を対象に行われてきた。その背景には、日本において人間、哺乳類、昆虫、魚類などのすべての生き物を「生類」とする動物観が存在し、輪廻転生という仏教的観念との結びつきから、生類の殺生は人間の生まれ変わりを殺生することになるため、供養は人間を含めた生類全般に対して行われる行為であったという指摘がある（長野，2015, p.211, 217）。例えば、山形県米沢市では、「草木塔」や「草木供養塔」と刻まれた石碑が存在するが、こうした石碑が建てられた背景として、草木にもそれぞれ靈魂が宿っており、そうした草木から得られる恩恵に感謝し、伐り倒した草木の魂を供養する精神があると言われている（米沢市企画調整部秘書広報課，2023）。

文化人類学においても供養に関する研究が行われており、その一つが真珠養殖業の真珠供養である。文化人類学者の床呂郁哉は、日本における真珠養殖を対象に、人間と非人間としての真珠（貝）や環境との関係に注目し、実際に現場で生成している出来事の文脈に即して記述した。養殖技術者の現場の語りにおいて、真珠貝を心なき物体のように見なすのではなく、むしろ独自の感覚や能動性を備えた御し難い主体として見なすような態度が認められたと述べる。特に、真珠貝供養の現場から、「ひと」は「もの」に対して一方的に優越的な立場から支配や管理、統御するのではなく、むしろ「もの」に対して感謝や慰霊、懇願するような態度が特徴的であると指摘する（床呂，2011, p.71, 86）。すなわち、非人間である他種に対する感謝や慰霊を内包する供養精神は、他種の主体性を認めるとともに、人間と他種の間を捉えるうえで重要な精神的営為なのだ。

こうした供養精神に着目することで、これまで二分法的に語られてきた人間と他種の間とは異なる新たな側面を見出すとともに、両者の関係の再考に繋がるはずである。同時に、供養精神という他種の生命をまなざす精神的営為は、人間がどのように他種を捉えているかを明らかにするための鍵となり得る。そこで、本研究はこれまで数千年にわたって養蚕農家と完全家畜の昆虫・蚕の間によって継承されてきた養蚕業に焦点を当て、蚕を飼育し繭

を生産する養蚕農家の蚕に対する供養精神に着目する。養蚕農家は生糸の原料となる繭を生産する工程を担っているが、生糸を生産するためには蛹の状態の蚕を殺生せねばならない。それゆえ、これまで日本の養蚕業では養蚕信仰という民間信仰を通して、蚕に対する供養を行ってきた。殺生を伴う生業において、養蚕農家は他種である蚕とどのように向き合い、関係を築き上げているのか。本研究では、関東甲信越地方の養蚕農家に対するインタビュー調査を通して両者の関係を明らかにするとともに、彼らの蚕に対する供養精神について分析・考察する。

## 2 養蚕と信仰——その歴史と諸相

本研究のインタビュー結果に関する記述に移る前に、本章ではこれまで日本国内の養蚕業がどのように展開されてきたのか、そして養蚕農家たちは「養蚕信仰」という蚕に対する供養精神を内包する民間信仰を通していかに蚕と向き合ってきたのかを概観する。具体的に、「2.1 養蚕とは何か」では養蚕の具体的な工程について整理する。なお、文献資料だけでは得られない現場の様子を捉えるため、埼玉県U地区を拠点とする養蚕農家のG氏（埼玉県30代男性。詳細は「3.2 対象・期間・場所」に記述）が実施する養蚕の工程を記述する。G氏は大学卒業後の2011（平成23）年より家業である養蚕業に従事しており、5月上旬から10月中旬の約半年間にかけて年6回、約50万頭の蚕を飼育している。本調査では、養蚕の工程におけるG氏の行動や蚕を飼育するにあたって気をつけている点に焦点を当て記述する。なお、養蚕の工程に関する用語や内容、期間については以下の表にまとめる。

作業名称	作業内容	作業期間
稚蚕飼育（ちさんしいく）	卵から孵化したばかりの蚕の飼育。	約10日間
掃き立て（はきたて）	孵化した蚕に初めて桑の葉を与えること。	約1～2時間
摘桑（てきそう）	蚕の餌である桑を収穫する作業。	約1か月
給桑（きゅうそう）	蚕が繭を作るまで蚕に餌となる桑を与える作業。「桑くれ」とも呼ばれる。	約1か月
上簇（じょうぞく）	成長した蚕が繭を作る場所である「簇（まぶし）」と呼ばれる格子状の道具に蚕を入れる作業。	約1日
営繭（えいけん）	簇に入った蚕が繭を作ること。	約2～3日
選繭（せんけん）	出来上がった繭の中で規格外の繭を取り除く作業。	約1～2日
取繭（しゅうけん）	繭の出荷に向けて機械などを通して簇から繭を取り外す作業。	約1～2日
出荷	繭を農協等へ出荷する作業。	約1日

※表1 養蚕の作業名称・内容・期間（筆者作成）

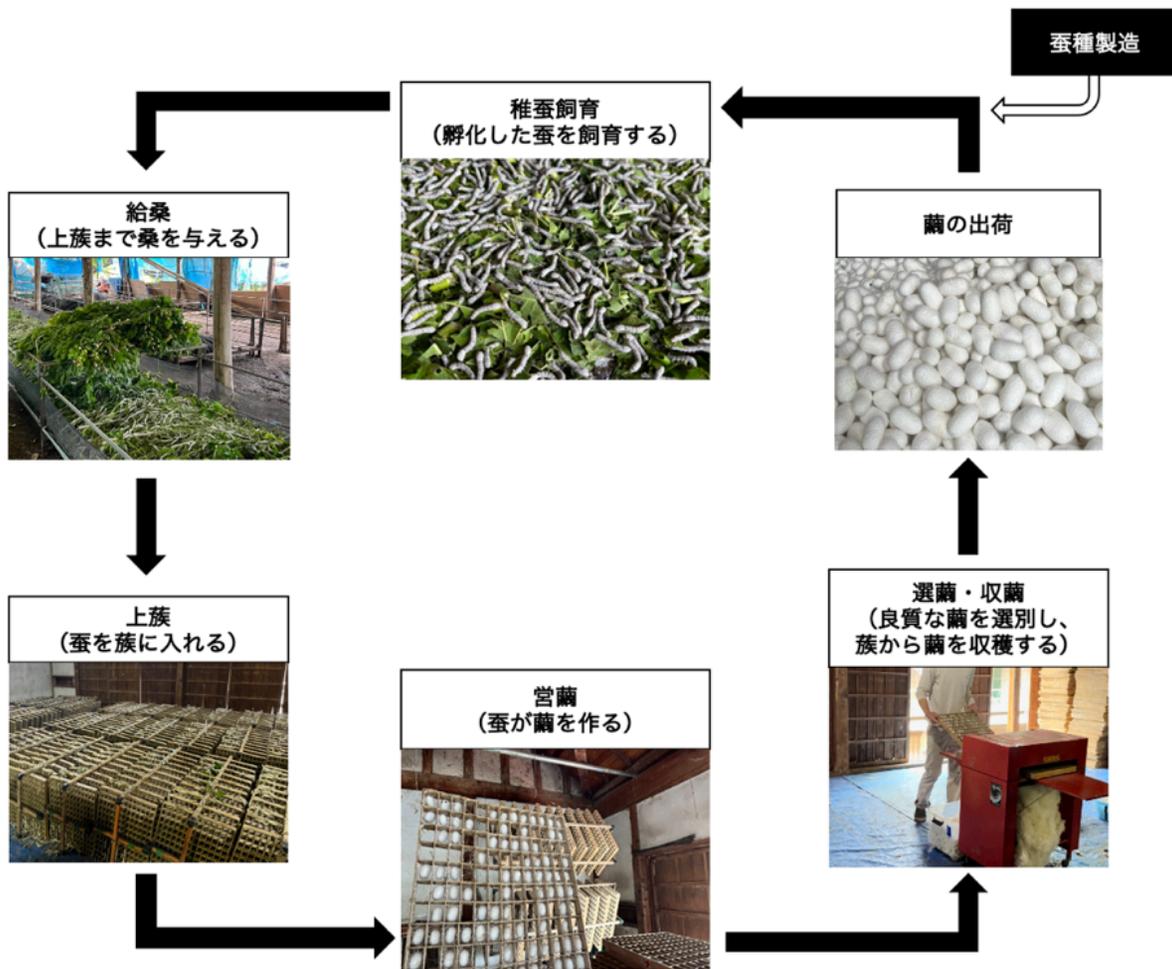
次に、「2.2 養蚕の歴史と現状」では、日本国内における養蚕業の歴史について、主に開国以降の蚕糸業全体の経済的興隆を中心に記述する。最後に、「2.3 養蚕における弔い——養蚕信仰の諸相」において、古来養蚕農家の間で信仰されてきた、繭の豊作や除災、蚕に対する供養精神を内包する「養蚕信仰」について記す。

### 2.1 養蚕とは何か

養蚕の主な目的は、蚕の飼育および生糸の原料となる繭の生産である。養蚕において扱われる蚕は、昆虫の鱗翅目（りんしもく）・カイコガ科・カイコガに分類される昆虫であり、卵から孵化し幼虫となった後4回の脱皮を

し、約2日かけて繭を作った蚕は、繭の中で蛹となり、その後10～15日ほどで羽化し、成虫（蛾）となる（小泉，2015，p.6-7）。現在日本では農家で飼育される蚕の他に、遺伝資源として研究所や大学に保存されているものも含め約600種類の蚕が存在し、養蚕に利用される蚕は、病気に強く、飼育しやすく、繭が大きいといった特性を選出し、その性質を固定することで品種化されたものである（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）企画戦略本部新技術対策課，2008，p.2）。

養蚕農家は、毎年5月から10月の半年間をかけて、蚕の餌である桑の葉を収穫し、蚕を飼育する。約1か月かけて蚕は成長し繭を作るが、その後繭は製糸工場へ出荷され、そこで生糸が生産される。こうした生糸生産に関わる一連の業界は蚕糸業と呼ばれるが、蚕糸業は蚕の卵を専門に製造する「蚕種業」、蚕を育て繭を生産する「養蚕業」、生糸を生産する「製糸業」の主に3つの業種で構成されている。本研究が焦点を当てる養蚕業の工程については、以下の図の流れで行われる。



※図1 養蚕の生産サイクル（筆者作成、筆者撮影）

蚕種業においては、人為的に成虫となった蚕を交尾させ、より良質な生糸を生み出す蚕の卵を生産する。繭や生糸の生産能率を上げるためには、微粒子病にかからず、蚕の品種が優良で生産性が高い必要があり、例えば幼虫や蛹が強健であり、収穫量が多いなどの特徴があげられる（財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所，2010，p.88-89）。なお、今日における日本国内の蚕種製造は、長野県や愛媛県を中心に行われている。蚕種業者が製造した蚕の卵は全国各地の稚蚕飼育所へ送られ、蚕の幼虫の成長が安定する約1～3齢まで育てられ、その後成長した蚕は各養蚕農家のもとへ送られる。

稚蚕飼育に関して、養蚕農家自身が行う場合もあり、G氏も自ら稚蚕飼育を実施している。具体的に、一蚕期あ

たり約8万頭の稚蚕を約10日かけて2～3齢まですべて桑で育てている。1～3齢の稚蚕は非常に繊細な時期であり、カビやウイルスを媒介した病気にかかりやすい。財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所によると、一般の蚕の飼育において発生する蚕病は、そのほとんどがウイルスなど病原微生物の寄生によるものであり、蚕室や蚕具などが蚕病病原によって汚染されていることが多いため、環境を清浄する必要がある（財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所，2010，p.100）



写真1・2 稚蚕飼育の様子（筆者撮影・編集）

その後、養蚕農家は約30日間かけて「摘桑」と「給桑」を行い、5齢になるまで蚕を育てる。財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所によると、日本では、春から晩秋にかけて桑の葉が着生しているため、この時期に蚕を飼育する。複合経営で養蚕を行う場合、他の農作業との関係で生産者の労力に余裕のある時期や、桑の仕立法、桑の葉の収穫法、養蚕の作柄や生産する繭の品質の関係などを考慮し、各地方の立地条件や気象条件を見極めながら蚕の飼育と掃き立ての適切な時期を決める必要がある。実際に、蚕を掃き立てる量は飼育時期や個々の養蚕農家の事情によって異なるが、掃き立てる蚕種1箱（2万頭）に対して必要な桑の量は、春蚕で600kg（全芽量）、初秋蚕で415kg（葉量）、晩秋蚕で450kg（葉量）と推定されている（財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所，2010，p.99-100）。

G氏の場合は、毎年5月上旬から10月中旬の約半年間にかけて年6回、約50万頭の蚕を父親と主に2名で飼育しており、約1か月をかけて繭を生産するサイクルを組み合わせながら養蚕を行っている。G氏は、一蚕期に8万頭もの蚕を飼育するが、最大で1日に500kg（トラック約2台分）の桑の葉が必要となり、蚕を飼育する際は常時桑の葉を収穫する。また、先述の衛生面に考慮して稚蚕飼育と上簇の時期が重ならないようにし、大きな労力がかかる収繭の作業や最も桑が必要となる5齢の蚕の飼育の時期が重ならないようにするなど、1日の労働力を基準として蚕の飼育の予定を立てていた。



写真3・4 給桑の様子（筆者撮影・編集）

その後、5 齢に成長した蚕を格子状の道具「蔴（まぶし）」に入れる「上蔴」という作業が行われる。蚕は上昇する習性があるため、蚕は蔴の格子の隙間に入っていき、そこで繭を作る。この回転蔴は、蚕の上昇する習性を生かし、上部に蚕が集まり重くなると回転をすることで、満遍なく蚕が隙間に入るような仕組みになっている。こうして繭を作り始める準備ができた蚕は、2～3 日かけて繭を作る。



写真 5・6 上蔴と営繭の様子（筆者撮影・編集）

こうして完成した繭を出荷する際に、まず「選繭」という良質な繭を選別する作業を行う必要がある。具体的に、蔴を日の光に透かしながら、2 頭の蚕が 1 つの繭を作る「玉繭」や蚕の糞尿で汚れた繭などを見つけ、蔴から取り除いていく。その後、良質な繭だけが残った蔴から繭を取り外す「収繭」の作業を経て、養蚕農家は主に農業協同組合（農協）へ繭を出荷する。G 氏の場合は、左の写真のように機械に蔴を通して繭を取り外し、年間約 1,000kg の繭を G 氏の拠点である U 地区の農協へ出荷している。



写真 7・8 選繭と収繭の様子（筆者撮影・編集）

## 2.2 養蚕の歴史と現状

では、上記のように人間を介して蚕を育て繭を生産する養蚕という営みは、これまでいかにして日本国内において発展してきたのだろうか。本節では、養蚕の歴史について体系的に整理された財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所の『養蚕』（2010 年発行）を中心に、これまでの養蚕の文化と産業の歴史について記述する。

まず、養蚕の起源について、日本国内の養蚕業は帰化人によって 3 世紀頃に始まったとされている。その後、646 年の大化改新や、701 年には大宝律令が制定され、絹は税収の一つとして捉えられると同時に、その後平安朝時代には全国的に養蚕や製糸の技術が普及することとなった。中世に入ると、治安の不良や荘園制度の崩壊、貨幣の流通などの影響を受け、養蚕業は衰えた。この時代における養蚕や製糸はほとんど農家の自給生産にとどまって

おり、それらに関する技術改良は顕著に見られなかった。近世初期においては、土地を基盤とした農業中心の自給自足的な自然経済が基本をなし、生産性は低かったものの、治安が良く、領主と農民との権力関係の変化などによって次第に余剰生産が可能となり、米や麦を中心とした農業から特産物農業へと発展し、技術的向上も見られた。他方、幕府の財政的貧困により養蚕業が奨励され、蚕種、繭、生糸、真綿、絹織物の需要が増加したことで、それらの生産が専門化し、蚕種製造、養蚕、製糸および機織りなどが独立分化していった。また、各藩において、養蚕業先進地からの技術の移入や、農民に対する技術指導が盛んに行われ、多くの養蚕関係の書物が刊行されるなど、日本特有の養蚕技術が確立した。その後、1859（安政6）年に横浜が開港した際には、その当時欧州で蚕の微粒子病が蔓延したことによる繭の生産の低下や労働賃金の高騰などによって生じた養蚕業の衰退を契機に、蚕種輸出に続いて生糸輸出が拡大した（財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所，2010，p.9-10）。

その後明治時代では、政府は政治的自立に向け、まずその基礎として経済的自立を実現することを目的に国家の保護の下で生産の発達と商工業の繁栄を進めていき、明治国家を主体として上からの殖産興業と近代化の政策が進められていった（周，1989，p.69-70）。そして、その政策の一つとして位置付けられたのが製糸業であった。開港までは製糸は主に養蚕農家の副業であり、小規模で技術が低く、生産された絹織物は贅沢品であったこともあり、国内市場の需要には限度があったが、開港後は欧米市場の大量の需要によって製糸業は日本最大の輸出産業となり、外貨獲得や軍需品などの輸入に重要な役割を果たした（周，1989，p.99）。

しかし、蚕糸業の飛躍的な成長は、昭和初期を境に大きく低迷することとなる。1929（昭和4）年に始まった世界恐慌によってアメリカの絹産業が打撃を受けたことで、その当時8億円近かった生糸の輸出額は1931（昭和6）年には半減した。さらに、1937（昭和12）年に始まった日中戦争によって日本経済は戦時体制に追込まれ、貿易の悪化による生糸輸出の減少は日本の養蚕や製糸業の体質を大きく転換させた。その後、1941（昭和16）年には生糸輸出は完全に途絶し、桑園も食糧増産のため減少していった。この時期は、繭の生産量から捉えると、日本の養蚕業が最高生産量を記録した時点から最低となった時点を含んでおり、極めて変動が激しい時代であった（財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所，2010，p.11-12）。

その後、終戦から現在においては、戦時中に軍需用として急速に発展したナイロン工業が終戦と同時に民需要に転換し、1946（昭和21）年には絹靴下によってナイロンの靴下が過半数を占めた。それにより、終戦後の輸出生糸は靴下用から再び織物用へと変わった。また、1950（昭和25）年の朝鮮戦争の勃発を契機に、特需ブームの影響で経済復興が進み、養蚕業が再び重要視されることとなり、1954（昭和29）年には生糸輸出が7.6万俵、1955（昭和30）年には繭生産量が11.4万トンに達した。その後、生糸輸出の不振や国内需要の低迷により、繭価が低下したものの、1960（昭和35）年以降は高度経済成長の影響もあり、絹織物の内需が急増し、1964（昭和39）年頃から養蚕が復興していった。一方で、こうした復興は日本の蚕糸業が輸出産業から内需産業へと質的転換したことを意味し、歴史的に見て重大な転換点であった。1965（昭和40）年以降は、生糸消費の伸びは国内生産を超過し、中国や韓国などからの生糸輸入は1969（昭和44）年以降急激に増加し、1972（昭和47）年には16.8万俵に達し、これは生糸総需要量の34%に当たった。すなわち、日本は世界における生糸の消費国および輸入国へと変容するに至ったのである（財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所，2010，p.12-13）。

平成に入ると、徐々に生糸の輸入量が国内生産量を席巻し、国内の養蚕業は大きく低迷することとなる。具体的に、農林水産省によると、現在養蚕は関東や東北地方を中心に小規模な産地が残るのみであり、群馬県が生産量の3割を占める状況である。また、養蚕農家の高齢化が進行し、養蚕農家の主な従事者は70歳以上が6割を占め、養蚕農家数については57,230戸存在した1989（平成元）年と比べ、2022（令和4）年においては163戸と激減しており、それに伴って繭の生産量も26,819トン（1989年）から51トン（2022年）に減少し、国産生糸のシェアは0.1%

とされている（農林水産省，2023，p.1-2）。このように、近年日本国内において養蚕業自体が衰退の危機に直面しているのである。

他方、近年「スマート養蚕」と呼ばれる、気温や湿度など蚕の飼育に重要な外的環境を調節できる無菌室などの施設を利用し、年間を通して蚕を大規模に生産する工業型養蚕のシステムが台頭している。スマート養蚕技術とは、新しい産業のインフラとして合理的に工業化された養蚕技術を意味し、蚕の幼虫飼育から繭収穫までを効率的に行うことを目的としている。ハード（設備）とソフト（飼育技術）の2つの技術により構成されており、ハードでは最新の工学技術を取り入れ、飼育管理の自動化や飼育環境の最適化を可能とし、遺伝子組換えされた蚕にも対応する飼育設備の開発を進めている。また、ソフトでは、従来の養蚕業の技術を活用し、より省力化された飼育技術を確立することが目指されている（麻生・田中，2019，p.181）。

実際に、近年このようなスマート養蚕システムは全国各地で社会実装されている。例えば、2017（平成29）年熊本県山鹿市に竣工した国内最大規模の養蚕施設を運営する（株）「あつまる山鹿シルク」は、10万本の桑を定植し、24.6ヘクタールの桑園を整備するとともに、桑の葉を原料とした人工飼料を用いて年間24回飼育することが可能な無菌周年養蚕システムを構築し、蚕の安定生産を実現している（農林水産省，2023，p.12）。また、年間を通じて安定した無菌環境で蚕を飼育することで通年型のバイオ産業化を実現し、これまで重労働であった一連の作業を効率化することで生産性を向上させている（株式会社あつまるホールディングス，2023）。

また、愛媛県の「ユナイテッドシルク」（株）も、新しいシルク産業の創出に向け、スマート養蚕システムやシルク原料加工設備を備えた工場を通して、蚕の飼育から原料抽出までを行う体制を実現している。具体的に、ユナイテッドシルクではシルクの主成分であるフィブロインというたんぱく質に注目し、繭からフィブロインを抽出する独自の加工技術を確立し、「シルク水溶液」や「シルクパウダー」を精製している（ユナイテッドシルク株式会社，2023）。すなわち、これまで繊維として用いられてきたシルクは、化粧品や医薬品、食品など多種多様な用途へ展開する可能性が高く、今日においてもシルクに関わる研究や技術開発は継続的に行われているのである。

このように、数千年にわたって続いてきた養蚕は、日本の経済興隆に大きく貢献した生業であった。今日養蚕業は従事者の高齢化や後継者不足などの影響により衰退しているものの、一方で蚕の大量生産や効率化を向上させるスマート養蚕技術の領域における研究や社会実装が台頭しており、工業型養蚕に拍車がかかっているのである。

## 2.3 養蚕における弔い——養蚕信仰の諸相

日本における養蚕の歴史を踏まえたうえで、養蚕農家たちは生糸生産のため飼育してきた完全家畜の蚕をどのようにまなざし、ことに人為的に殺生することに対してどのように考えているのだろうか。こうした蚕の死に対する弔いの精神を紐解く鍵となるのが、古くから養蚕農家の間で信仰されてきた「養蚕信仰」である。養蚕信仰には、主に3つの目的があるとされる。具体的に、富岡製糸場世界遺産伝道師協会によると、①蚕が病気や災害に見舞われず無事に成長し、多くの繭が取れることを神仏に願う、豊蚕・豊繭の祈願と報謝、②豊蚕を妨げる要因となる雹や凍霜害、蚕繭を食害するネズミなどを除去するための除災の祈願、③雹や凍霜害などで桑が被災し、蚕を飼えなくなり、投棄せざるを得なかった蚕の鎮魂慰霊である（富岡製糸場世界遺産伝道師協会，2019，p.1）。

このような養蚕信仰における蚕神について、例えば古来養蚕が盛んに行われてきた群馬県における代表的な養蚕信仰は、茨城県つくば市の「蚕影神社」を本社とし、養蚕の縁起として「金色姫伝説」とともに広く信仰されていた「蚕影信仰（こかげしんこう）」、茨城県神栖市に鎮座する蚕霊山星福寺を養蚕の守護神とし、江戸時代から絹（衣）笠信仰布教の中心とされていた「絹笠信仰」、オシラサン（蚕神）を各農家で祀る「オシラサン信仰」、明治時代の

中頃に神奈川県相模原市に鎮座する皇武神社が始めたとされ、埼玉県の秩父や熊谷を経て群馬県の東毛地方で信仰された「オキヌサン信仰」という4つの信仰が存在する（富岡製糸場世界遺産伝道師協会，2019, p.1）。こうした養蚕信仰や蚕神について体系的な整理を行った阪本英一によると、蚕神については、『日本書紀』や『古事記』における保食神、埴山姫、稚産霊神といった神道の神、仏教の馬鳴菩薩、金色姫、民間信仰のオシラサン、そしてネズミ除けのための猫神や蛇神など、さまざまな蚕神が存在する（阪本，2008, p.463-464）。また、阪本は、蚕神は信仰の始まりから曖昧であり、宗祖や教団組織も存在せず、民間信仰や民俗信仰と呼ばれるものであると指摘する。さらに、蚕神信仰は養蚕の発展とともに広がり、約1世紀の間「流行り神」のように広まったが、養蚕業の終焉以前にその姿を消したと述べる（阪本，2008, p.466-467）。すなわち、養蚕にまつわる民間信仰は、生き物である蚕を育てる養蚕農家による養蚕という生業を通して脈々と受け継がれてきた精神的営為なのである。

このように、養蚕信仰は各地域の風土の中で多様な様相を呈している。同時に、養蚕農家を介して蚕を育てる養蚕という生業を通して、養蚕信仰は養蚕農家の精神的支柱として醸成されてきた歴史があるのだ。すなわち、蚕の生死に向き合う養蚕という生業において、古来日本では養蚕農家を主体とする他種・蚕をまなぐ精神的営為が継承されているのである。

### 3 方法論

以上に述べた日本における養蚕業の歴史や養蚕信仰という蚕をまなぐ民間信仰について踏まえたうえで、本研究では関東甲信越地方の30代から80代の養蚕農家8名に対してインタビューを行った。本章では、インタビュー調査の詳細について、調査方法や対象、期間、場所、そして8名の養蚕農家のプロフィールについて以下に記す。

#### 3.1 調査方法

本研究では、養蚕農家と蚕の関係および蚕の殺生に対する供養精神について調査を行う。具体的に、古くから養蚕が盛んである群馬県、埼玉県、山梨県の某所における養蚕農家8名を対象とした半構造化インタビューを通して、蚕を育てる動機や蚕の殺生に対する考え、供養に関する祭祀への参加の有無などについて調査を実施した。なお、本調査のインタビューにおける質問事項は以下の通りである。

##### 【インタビュー項目】

- ・蚕を育てる動機は何ですか。
- ・養蚕を通して、蚕に対してどのような気持ちを抱きますか。
- ・蚕の殺生に関してどのような考えをお持ちですか。
- ・「供養」についてどのような考えをお持ちですか。
- ・蚕に対する供養に関して、儀礼などを行うことはありますか。また、儀礼などを行う場合、具体的にどのようなことをしていますか。
- ・蚕の供養に関する祭祀などに参加していますか。

### 3.2 対象・期間・場所

本研究のインタビューは2022年12月から2023年6月にかけて実施し、その対象は関東甲信越地方（群馬県・埼玉県・山梨県）の某所を拠点に活動する養蚕農家8名である。関東甲信越地方は、古くから養蚕が盛んであり、現在も全国的に見ても繭の生産が多い地域である<sup>1</sup>。各調査対象者の性別や年齢、蚕の年間飼育頭数などの詳細は以下に示した表のとおりである。

なお、本インタビューでの音声データについて、内容を理解しやすくするため、文意を変えず、口調の細部等を修正した。また、調査対象者のプライバシーに配慮し、氏名や本拠地等はアルファベットでの表記としている。具体的に、P地区はA氏とB氏の拠点、Q地区はC氏の元拠点、R地区はC氏の現在の拠点、S地区はD氏の拠点、T地区はE氏の拠点、U地区はF氏とG氏の拠点、V地区はH氏の拠点を指す。

調査対象者	性別・年齢	本拠地	養蚕開始～終了年	年間飼育頭数、掃き立て回数
A氏	女性・70代	群馬県P地区	1997（平成9）年～現在	約10～20万頭、年2～3回
B氏	女性・40代	群馬県P地区	2021（令和3）年～現在	約6万頭、年2回
C氏	男性・30代	群馬県R地区	2016（平成28）年～現在	約15～16万頭、年5回
D氏	女性・80代	埼玉県S地区	1953（昭和28）年～ 2022（令和4）年	約2～3万頭、年3回
E氏	男性・60代	埼玉県T地区	1978（昭和50）年～ 2014（平成26）年	約150万頭、年6～7回
F氏	男性・60代	埼玉県U地区	1977（昭和52）年～現在	約50万頭、年6回
G氏	男性・30代	埼玉県U地区	2011（平成23）年～現在	約50万頭、年6回
H氏	男性・30代	山梨県V地区	2018（平成30）年～現在	約110万頭、年6回

※表2 調査対象者一覧（筆者作成）

また、具体的な各調査対象者のプロフィールは以下のとおりである。

【A氏（70代女性）】1997（平成9）年群馬県のP地区にて夫婦で養蚕を始めた。P地区は、群馬県内でもいち早く工業化や畑への転換が進んだ地域だと言われている。一方で、6年ほど前から、B氏を含め毎年新規で養蚕業に就農したいと申し出る人は増加傾向にあるという。もともとA氏は養蚕農家から繭を買い取り、製糸会社と取引を行う繭買商を営んでいたが、養蚕農家の減少に伴って、自ら養蚕農家として養蚕を始めることとなった。現在は、親戚や近所の人々に手伝ってもらいながら、春から秋にかけて、年に2～3回、約10～20万頭の蚕を飼育し、冬はほうれん草を栽培している。

【B氏（40代女性）】群馬県のP地区にて2021（令和3）年に養蚕を始めた新規養蚕農家である。もともと医療現場で働いていたB氏は、対処療法が中心の西洋医学のあり方に違和感を覚え、仕事を辞めたと同時に、以前から関心を持っていた農業に関わり始めた。その後、祖父母が養蚕を営んでいた背景も踏まえ、養蚕業に興味を持ち、群馬県内の養蚕学校で技術を学んだ。現在は、P地区でA氏から養蚕の技術を教わりながら春から秋にかけて年2回、約6万頭の蚕を飼育している。

【C氏(30代男性)】大学卒業後青年海外協力隊として約2年間ネパールへ赴任した。その後、日本での研修先の繋がりから、2016(平成28)年より地域おこし協力隊として群馬県Q地区にて養蚕を開始した。Q地区周辺は、群馬県内でも特に養蚕が盛んな地域だと言われる。現在は、Q地区に隣接するR地区にて春から秋にかけて、5回、15～16万頭の蚕を飼育している。

【D氏(80代女性)】埼玉県S地区にて高校卒業後の1953(昭和28)年頃に家業である養蚕業に従事し、1964(昭和39)年に結婚後、2000(平成12)年まで夫婦で春から秋にかけて養蚕を行い、冬はこんにやくを生産していた。一般的に養蚕農家は蚕を育て繭を生産することに特化しているが、D氏の実家では自ら育てた繭から糸も生産していた。夫が亡くなった後、2022(令和4)年まで22年間一人で春から秋にかけて年に3回、約2～3万頭の蚕を飼育していた。

【E氏(60代男性)】1978(昭和50)年埼玉県T地区にて養蚕を始め、2014(平成26)年に起こった大雪の機に養蚕をやめた。E氏は代々養蚕を営む農家として高校卒業後に家業を継ぎ、E氏の父親の代から始めていたシイタケの生産と並行して年間約6～7回、約150万頭もの蚕を飼育していた。現在は、T地区でシイタケ農家として生計を立てている。

【F氏(60代男性)】現在埼玉県U地区にて約150年前からの家業である養蚕業を営んでいる。U地区周辺を含め、50年前には約4,000戸もの養蚕農家が存在したと言われるが、現在は2戸に減少している。F氏は、高校卒業後に埼玉県内の蚕業講習所で約2年間養蚕に関する勉強をした後、1977(昭和52)年に実家の家業を継いだ。その当時は、蚕の量産体制が確立しており、大量に蚕を育て繭を出荷する時代であった。現在は、息子であるG氏(30代男性)とともに、春から秋にかけて、年に6回、約50万頭の蚕を飼育している。

【G氏(30代男性)】現在埼玉県U地区にて約150年前からの家業である養蚕業を営んでいる。G氏は、高校で養蚕を学び、高校卒業後は大学へ進学し経営学を専攻した。大学卒業後の2011(平成23)年より実家が営む養蚕業に従事し始めた。現在は、父親であるF氏(60代男性)とともに、春から秋にかけて、年に6回、約50万頭の蚕を飼育している。

【H氏(30代男性)】現在山梨県V地区にて約150年前からの家業である養蚕業を営んでいる。V地区では、1975(昭和50)年から1985(昭和60)年頃に養蚕業をやめて果樹農家に転向する農家が多く、現在V地区における養蚕農家はH氏1戸のみと言われている。H氏は、専門学校で動物飼育を学んだ後、動物園へ就職し飼育員として働いていたが、家業を継ぐため、2018(平成30)年より実家が営む養蚕業に従事し始めた。現在は、春から秋にかけて、年に6回、約110万頭の蚕を飼育している。

## 4 結果——養蚕農家の語りから

本章では、養蚕農家8名に対するインタビューの結果について整理する。まず、「4.1 養蚕という営み」では、長い時間をかけて蚕を育てる養蚕という生業の実態や、養蚕業に従事してきた背景、そして近年養蚕農家の高齢化

や後継者不足等によって養蚕業の規模自体が縮小する中で彼らはどのような思いを抱いているのかについて整理する。続く「4.2 養蚕における供養」においては、養蚕農家の蚕に対する供養精神や関連する祭祀等への参加について記述する。「4.3 養蚕の継承への想い」では、人間の手を介さねば生きられない完全家畜の蚕に向き合う養蚕農家の姿や彼らと蚕の関係に着目し、蚕という種自体をまなざす養蚕農家の語りを通して、生命の継承という観点から養蚕農家の供養精神について記す。最後に、「4.4 伝統産業としての養蚕」では、インタビューを通して浮かび上がってきた、これまで数千年にわたって続いてきた養蚕の伝統産業としての側面に焦点を当て、ことに30代・40代の若手養蚕農家たちは今後の養蚕、そして人間と蚕の関係をどのように捉えているのかを記述する。

#### 4.1 養蚕という営み

本節では、養蚕農家の生活空間に密接に関わる形で展開されてきた養蚕という生業の実態に注目し、彼らが養蚕を通してどのように蚕と関わってきたのかを整理する。

まず、E氏（埼玉県60代男性）やF氏（埼玉県60代男性）は、幼少期に生活空間の中で大量の蚕を飼育しており、自らの生活と養蚕が密接に関わっていたと話した。例えば、E氏は畳を上げて家屋の中でも蚕が飼育できるようにしていたという。

[E氏] お蚕に追い出されて、寝るところも全部お蚕に占領されちゃうから、屋根の下はね。子供の時は家の中の隅っこの方で寝るわけだよね。お蚕があるうちは。畳も全部あげちゃって。お蚕用にするからね。

また、F氏は、高校卒業後に講習所にて2年間養蚕について学んだ後家業である養蚕業に従事したという経緯があるが、幼少期から養蚕の手伝いをするなど生活の延長で養蚕に触れる機会が多かったと話す。

[F氏] 家にいれば生活の中にお蚕がいたから（笑）桑くれしろだのなんだのやったわけだからね。（略）小学校の頃から夏場はお蚕ばかりだったから（笑）それこそ、人間の生活の中にお蚕がいたんだから。その座敷で畳上げて蚕飼っていたんだよ（笑）人間は廊下で寝ていたんだから（笑）（略）お蚕飼っている家じゃ、昔だったら学校行っていたってさ、「今日お蚕上げだから暇もらってくる」っていう時代もあったんだよ（笑）そのくらい生活と密着していたから。

続いて、F氏は、繭の出荷量を重視する時代では早朝から夜遅くまで養蚕の作業を行っており、今よりも多くの蚕を飼育していたと話す。

[F氏] 親父の手伝いをしているうちは、とにかく忙しかった。量やっていたから（笑）（略）労働時間でいうと、日が昇って、5、6時に起きて、下手すると12時までっていう作業になるから（笑）繭掻きなんか、下手すると2、3時っていう時もあるって（笑）

D氏（埼玉県80代女性）も、1975（昭和50）年頃は繭を大量生産していたと話し、多くの人に手伝ってもらいながら養蚕の作業をしていた。

[D氏] 上簇の時は人手がいるから、何人が頼んでやったけどね。今は機械だから手間がかからないからね。(略) 1番頼んだ時、25人は頼んだね。その頃は蚕の量が多かったから。(略) 昭和50年頃は多かったかな。年間1トンの繭を生産していたからね。

このように、多くの蚕を飼育し生計を立てている養蚕農家にとって、蚕を敬い、「お蚕様(おこさま)」と呼ぶことがある。F氏は、蚕を飼育し繭を生産することで生計を立てる養蚕という生業について、「人間は蚕に食べさせてもらっている」と表現している。

[F氏] 結局飯の種だったから。普通に家で仕事になっていたのが労働力として入ったわけなんだけど。(略) 結局、繭の収量イコール収入になっていたから(笑)(略) 結局農家だってお蚕育てて繭にして、それを売ってお金にして飯食っているわけだし、お蚕さんに食わせてもらっているようなものだから。

また、それぞれ養蚕農家が自らの生業を続けていくのと同時に、同じ地域の養蚕農家が集まって年中行事や祭りへ参加するなど、養蚕農家同士の共同性が見られる。例えば、D氏は、養蚕農家が今よりも多かった時代では、旅行や食事会を通して集まる機会があったと話した。

[D氏] その頃は旅行とか、集まって慰労会みたいなものはしましたね。(略) まだみなさんが養蚕をしている時だから…何年前だろう。30年くらい前は養蚕をしている人たちが集まって食事会や飲み会みたいなものをしましたね。

以上の養蚕農家の語りから、蚕を育てる養蚕という生業は養蚕農家の生活自体と密接に関わっていたことがわかる。同時に、個々人で養蚕を営みながら、慰労会など定期的に養蚕農家が集まる機会もあり、養蚕農家の共同性も見られる。

では、これまで養蚕業に長年携わってきた養蚕農家たちは、どのような経緯で養蚕業に従事したのだろうか。例えば、D氏は、実家が養蚕業を営んでいたため、実家での手伝いの延長で養蚕に従事したと話す。

[D氏] やりたいっていう気持ちより、ここでしているからね。実家の延長のような気持ちですよ。

家業である養蚕業に従事するG氏(埼玉県30代男性)は、まわりに養蚕を志す同世代がいない中、高校で養蚕を勉強したことがきっかけで養蚕に対する関心が高まったと話す。

[G氏] もともと実家が養蚕をやっているのになんとか頭の中にはあったのですが、きっかけは高校進学の時、実家が養蚕をやっているってことで養蚕が学べる学校に行って、そこで養蚕の歴史や変遷を教わりました。そこで養蚕に興味を持ち、養蚕をやらなきゃと思ってから、養蚕のことを自分でも色々調べ始めましたね。(略) もちろん(養蚕をやろうとする同世代は)ゼロですね。(略) 養蚕をしようと思って学校に来ている人はいないと思います。

新しく養蚕を始めた養蚕農家の場合、もともと養蚕業自体に対して肯定的な印象が強く、主体的に養蚕業を選択

し従事し始めていた。例えば、2016（平成28）年より養蚕を始めたC氏（群馬県30代男性）は、養蚕農家の手伝いを通して、自分も養蚕をやってみたい気持ちになったと同時に、蚕を育てる養蚕の工程自体に魅力を感じていた。

[C氏] お蚕が大好きって人もいないじゃないですか、始めるのに。どっちかっていうと、お蚕ももちろん大切なんですけど、お蚕に携わっている人に憧れてってというのが強いですかね。（略）農家さん自体、憧れる方はいっぱいいるんですけど、そうだな…もう一段階あるじゃないですか、養蚕って。桑にとって、虫の様子見て、みたい。そういうところに奥深さを感じたのかな。（略）蚕は「稽古」だとベテランが言うから。そういうところは掘ってみたくなくなったっていうか、知りたくなくなってみたっていう感じですかね。

このように、家業として続いてきた養蚕業を継いだり、養蚕に魅力を感じて新しく養蚕業に従事したりするなど、養蚕農家が養蚕に携わってきた背景にはさまざまな経緯が見られる。しかし、このような養蚕業において、現在養蚕農家の数は全国でも160戸ほどに減少しており、従事者の高齢化や後継者不足等により、養蚕業自体の存続が危ぶまれている。実際にインタビューを通して、昭和後期頃から蚕糸業全体が縮小していく中で、現在60代のF氏のように、60代以降の養蚕農家たちは養蚕業の衰退を目の当たりにしていた。

[F氏] 昭和48年が生産量のピークだったんじゃないかな。高度成長期で、いろんなものを作っていた時代だったわけ。戦後ずっとものがない時代からいろんなものを作って。（略）色々化繊や何かが出てきたから、時代的にはしょうがねえんだろうけど。でも、繭から糸を作ってそれを利用していく技術もあるんだから、それはそれでなんとか残れば残しとかねえと、と思っているんだけど。すべて石油製品でいいかというわけでもねえと思うんで。

また、E氏は高校卒業後に就農する時点で、仕事として農業を選択する同世代は少なかったという。

[E氏] 若い時、この町は6,000人か7,000人くらいの町で、まだ（養蚕を）やっている農家は多かったけど、同じ年代で（養蚕を）始めたのはその中で6、7人くらいしかいませんでした。お蚕飼うって（家に）入った人はね。それくらい衰退したところに入っていったわけだから、やめた方がいいんじゃないかっていう人の方が多んじゃないかな。（略）みんながT地区に残れる仕事はないわけで。

続いて、F氏は養蚕のみならず農業自体を仕事として選択する同世代は少なかったと話した。

[F氏] 自分は農業高校出たけど、当時1クラス農業科があって、40人いたんですよ。そのうち農家をやっているのが5人だった（笑）その頃からみんなサラリーマンになっちゃっていたから。昭和40年だな。そういう時代だったから。

また、A氏（群馬県70代女性）は、養蚕だけで生計を立てることの難しさについて言及していた。

[A氏] でも、蚕はお金になんねえってよく言うんだよね。三度の飯が食べねえって（笑）ねえ、確かにそうだよ。

このように養蚕業自体が斜陽産業と化す中で、ことに30代・40代の若手養蚕農家たちはどのように養蚕の現状を捉えているのだろうか。実際に、若手養蚕農家の中には、衰退する養蚕業の現状を深刻に受け止めると同時に、いかに次世代に養蚕という生業を継承できるかを考え、意欲的に取り組もうとする姿が見られた。

例えば、2011（平成23）年より養蚕業に従事し始めたG氏の世代では、すでに養蚕農家数は約600戸、繭の生産量は約200トンほどであり（一般財団法人大日本蚕糸会，2023）、年々養蚕業の規模が縮小していった時期であった。その中で、家業である養蚕業に従事するG氏の養蚕に対する原動力は、より深く養蚕の歴史や文化を理解することだと話した。

[G氏] もっと養蚕を知りたいっていう気持ちや、どれだけお蚕や養蚕を理解できるかっていう気持ちですね。（略）歴史もそうですし、蚕の生理・生態も含めてです。お蚕とどうやって接したらいいとか。飼育技術的な話ですね。もちろんそれは人間の都合なのですが、どうしたらお蚕がより良い状態になるのか、養蚕を続けるためにはどうするべきかを考えたり理解したりするのがモチベーションかな。あとは、実際に必要としてくれる人が近くにいるっていうことが自分の中でとても糧になっていますね。

また、大学で経営学を学んだG氏は、養蚕業を経済的に盛り上げるというよりも、現時点で斜陽産業である養蚕業をいかに維持・持続できるかを意識しながら従事していると話す。

[G氏] あまり養蚕を盛り上げようとする視点はなくて、続けることが大事かなと思います。「養蚕を続けるために」というのは、今も昔も変わらないテーマですね。

また、H氏（山梨県30代男性）は、家業が養蚕を営む中、一度は他の仕事に就いたものの、養蚕業の魅力を再認識し、その後家業を継いで養蚕業を始めた経緯を持つ。H氏は、養蚕に対する動機について、自ら養蚕を続けることの意義を見出し、養蚕業継承への意欲が高いと話した。

[H氏] 蚕を飼う、育てることの動機は、もちろん第一は生活のためというか、生きていくために必要な仕事だからやっているというのが第一であるのですが、最近ここ3～4年くらい、父から代を引き継いで僕が事業を進めていくポジションになったくらいから、人間とお蚕の関係性っていうのを意識するようになって。人間社会の中でお蚕を仕事としてやっていくことの尊さというか、これを続けていけないといけないのではないかという使命感みたいなものが出てきて。繭が売れないから、安いからやめるっていうことはしたくないなと思うようになりました。どうにか養蚕で生きていく、これから先も繋げていくことをしなきゃいけない、みたいな使命感を持つようになりました。なので、今育てているお蚕を産業の中で絶対に役に立たせるんだ、と思って過ごしています。

以上のように、大量の繭を生産することで収入を得られていた時代から、養蚕業の縮小に伴って養蚕だけではうまく生計を立てられない時代へと変化する中で、養蚕農家たちは養蚕業の衰退に直面することとなった。ことに若手養蚕農家は養蚕業衰退の危機の渦中にいるが、それぞれが主体的に養蚕業を捉え、養蚕業の継承に対する意欲が高い。

## 4.2 養蚕における供養

蚕なしでは成立しない養蚕という生業について、蚕の生命のうえで養蚕業の経済活動が成り立つことに対する感謝を述べる養蚕農家の姿も見られた。例えば、A氏（群馬県70代女性）は、養蚕が終わる時期に蚕を飼育する場所へ行き、蚕に対して感謝を伝えると話した。

[A氏] 初めの時は、私一人だけ蚕場で「今年もよろしくお願ひします」って。終わった時、「ありがとね」って言うてくる、蚕場に。よくやっていたから、父ちゃんがそうやって。真似してじゃねえけどさ。いいことはしようと思ってさ。

また、D氏（埼玉県80代女性）は繭の出荷後など時間がある時に近所の養蚕にまつわる神社へお参りに行き、無事蚕が育ち繭を生産できたことに対する感謝を伝えていた。また、同じ地域の養蚕農家が集まって蚕の供養に関する祭りに参加することもあったという。

[D氏] お参りは行きましたよ。幾場所か。（略）蚕の神様っていうので、お参りに。私は弔いは行かなかったけど、他の養蚕農家さんたちは供養に朝早く行ってもらったらしいですよ。

E氏（埼玉県60代男性）は、養蚕農家が集まって小正月の行事として繭玉を作ることがあったと話す。

[E氏] 昔は楽しみが少ないからね。小正月の繭玉作りも（養蚕農家たちが）集まってやっていたし。それはお祭りといえばお祭りかもしれないけど。

F氏（埼玉県60代男性）は、U地区に昔存在した蚕糸会社では蚕の供養塔があったと話した。また、U地区にある神社では蚕糸祭が執り行われ、F氏は現在も欠かさずに参加しているという。

[F氏] 年中行事の中にみんな入っていたからね。お蚕が終わった後は神社の蚕糸祭もあったし。（略）U蚕糸に門があって、入ってすぐのところに蚕の供養塔があったんだよ。

H氏（山梨県30代男性）も、養蚕の時期に近所にある道祖神に向かって蚕に対する感謝を伝えていた。

[H氏] 蚕期の初めは「今年1年よろしくお願ひします」という願ひでしょうか。蚕期の終わりに挨拶する時は、「感謝」です。お蚕っていう存在がいてくれたおかげで仕事ができただけですから、その感謝と、「来年もよろしくお願ひします」っていう意味合いの気持ちも込めていたり。少なからず無駄な殺生をしまっているわけなんですよ。落としてしまったり、潰してしまったりとか。そういったことへの謝罪は、一応気持ちとしては込めているつもりではあります。

また、H氏は、天候など養蚕に悪影響をもたらす事象を避けるために祈ることはせず、祈りを通して自らの養蚕に対するプレッシャーが高まる時もあると話した。

[H氏]今のところ僕自身は、天候などの影響を祈るっていうこと…「影響を少なくしてください」といった意味合いはないです。完全に僕の技術不足にあると思っているので、「すみません」しか言わないです。「台風、今年来なかったです、ありがとうございます」っていうことはしないですね。台風が来ようが、何が来ようが、できないのは僕なので。(略)逆にプレッシャーがさらに増す時もありますけどね。「今年はしっかりやらんといけん！」みたいな。「よし！」みたいな感じになったりもしますけど。

G氏(埼玉県30代男性)の場合、養蚕を通して蚕に対する感謝の気持ちを抱いているが、同時に蚕への謝罪の気持ちもあると話す。

[G氏]感謝ってどういう気持ちなのかなって考えるんですよ。もちろん、「ありがとう」っていう気持ちもあるのですが、自分が意識している「感謝」の由来の一つとして、「ありがとう」と「ごめんなさい」という感情があります。「感謝」を漢字で書くと、「感じる」と「謝る」という言葉が入っていますよね。この「謝る」って感情が感謝なのかなと思っていて。もちろん「ありがとう」もそうなのですが、同時に「ごめんなさい」というか。お蚕はずっと家畜としての性質が強く、人間との密接な関係がありますが、そもそも養蚕って人間の都合じゃないですか。本当だったら、その辺りの桑畑で葉っぱを食べて大きくなって繭を作って蛾になって産卵するというサイクルを繰り返すのに、そのサイクルの一部を切り取って養蚕をするということなので、お蚕に対して「ありがとう」と「ごめんなさい」という感情を抱いていますね。

続いて、G氏は蚕の殺生に関して精神的に落とし所をつけるべきではないと考えていると同時に、上記で述べていた蚕に対するお礼と謝罪が「供養」に当たると考えている。

[G氏]落とし所がないというか、落とし所をつけるべきじゃないのかな、と。さっきの「ごめんなさい」って気持ちも含めて「養蚕」だと思っているので。俺も供養が具体的に何を示すかわかっていないですが、殺生に対する解決方法が「供養」なのだとしたら、多分さっき話した「ありがとう」と「ごめんなさい」の表し方として供養という形になると思います。それが供養塔とか供養碑、祭祀という儀式的形として現れるのだろうけど、俺の供養の姿勢として、養蚕という作業に手をつけた以上、そういった罪深さや続けるうでの苦しみ、苦悩も含めながら続けるってことがお蚕に対するマナーというか、付き合い方になるんじゃないかなって。

G氏のように感謝のみならず蚕の死に対する罪悪感を抱く養蚕農家は少なからずいた。例えばB氏(群馬県40代女性)は、蚕の殺生に抵抗感を感じ、当初養蚕を始めるのをやめようか迷っていたと話す。

[B氏]養蚕を始める時に、殺生のことがどうにも自分の中で処理できないので、養蚕をやめよう、始めないように…っていうか、やるのをやめようかと思っただくらいなんですけど。

C氏(群馬県30代男性)も、農薬の影響で大量に死んでしまう蚕に対して可哀想だと感じ、養蚕や繭から糸を生産する工程を通して蚕の殺生に対する罪悪感を抱くことがあると話した。

[C氏] 去年も結構薬害くらって死んじゃった時はね、本当に…結構きますよね。薬害はね…やっぱり。普通に飼育していて死んじゃったりとか…しょうがないって言うと変だけど、いくらかはね、脱落しちゃう子もいるよねっていう感じなんですけど。(略) たまに思いますよ。罪深いことをやっているのかなって。それを思わないことはないです。わざわざ人間の都合でね。

このように罪悪感と向き合う養蚕農家の中には、供養に関する祭祀への参加を通してそうした感情と折り合いをつける姿があった。例えば、B氏は、蚕期が終わると蚕に対して感謝をするために供養の行事に参加しており、ここで蚕の殺生に対する違和感を晴らし、良質な繭を生産する気持ちを高まらせていた。

[B氏] ちゃんとした儀礼とかはしないですけど、一応蚕期が終わると、報告と供養…っていうかね、感謝しに。(略) 供養って言えば供養なのだろうけど、たくさんの命をいただいたことの、モヤモヤ…殺生感のモヤモヤをちょっと手放して、また来年もたくさん育てるっていうか、いい繭を作るっていう方に向けますね。行くことによってね。

当初B氏は蚕の殺生を伴う養蚕を始めることに躊躇していたが、製糸会社にある供養塔の存在や蚕の蛹を食用に活用するなど、生命が循環するイメージを持つことで蚕の死を乗り越えようとしていた。また、B氏は蚕に対する感謝や敬う気持ちを表す一つの方法として「供養」があると考えている。

[B氏] 日本人特有なのかもしれないですね。仏教的な思想や概念が染み付いている日本人だからできることなのかなとも思うけれども。命に対して、感謝とか。そういうことから、自然にね、日本語で供養ってなるのだろうけど、敬う気持ちとか感謝の気持ちなのかなって。

このように、自らの生活に密接に繋がる形で蚕を飼育する養蚕農家は、養蚕という生業を通して、蚕の生命をまなざすとともに、蚕によって生計が成り立つことに対する感謝の気持ちを持っていた。同時に、蚕の死に対する罪悪感も抱いていたが、それぞれが供養に関する祭祀への参加などを通して折り合いをつけながら自らと蚕の関係を再考していた。すなわち、蚕に対する感謝やその死に対する弔いを内包する「供養」という精神は、養蚕という蚕を育てる実践的営為から立ち現れているのである。

### 4.3 養蚕の継承への想い

前節のように養蚕農家はそれぞれ蚕に対する感謝や罪悪感の気持ちから供養を体現していたが、より包括的な視点で蚕の生命が循環するイメージを持つ養蚕農家の姿もあった。例えば、H氏（山梨県30代男性）の場合、蚕の死が人間の世界に活用されていくという、蚕の死がまた別のものへ生まれ変わったような感覚があると話した。

[H氏] 蛹で殺した時に命的なものは無になるんでしょうけど、ものとしてのまた違う何か生まれた気がします。それはそれでまた違う物質みたいな感じになるんでしょうけど、繋がってってくれたら嬉しいな、というような。

また、生き物である蚕の死が人間社会における次なる生へと繋がっているという生命観を有しながら、人間と蚕の相互関係自体に言及する養蚕農家の姿も見られた。インタビューの中で、F氏（埼玉県 60 代男性）は人間は蚕から生糸を一方的に得ているだけではなく、蚕の世話を通して蚕の種を継承させている側面もあり、人間と蚕はお互いに支え合っていると話していた。

[F氏] それこそ、お蚕だって、みんな品種保存しているし。そういうのを考えると、お互いに支え合っているんじゃないかとは思うんだけど。(略) お蚕だって人間の手を加えてやらないと絶えちゃうし。(略) 繭を煮るなんて石川五右衛門じゃねえぞっていうような話になるけど(笑) でも、種絶やさないようにしているし。その辺はお互い様だよって。どっちが絶えてもダメになっちゃうんだから。

すなわち、養蚕農家は人間と蚕の相互関係を意識していると同時に、養蚕という人間と蚕の密接な関係のうえで成り立つ生業を通して、蚕の「種」というより包括的な生命をまなざしているのである。

同時に、人為的に蚕の種を改変し、結果として人間の手を介さねば生きられない蚕の種の継承に意欲的な養蚕農家の姿もあった。例えば、H氏は、蚕という種を次世代へ繋げていきたい気持ちが強く、単にその種を保存するのではなく、産業において蚕の生命が活かされる形で養蚕を続けていくことの重要性を述べていた。

[H氏] 種を繋げていきたいっていう意味合いが大きいです。やり方はその時々で色々あると思うんですよ。僕のやり方は、今はいいかもしれないですけど、5年後悪いかもしれないっていうのは、どの業界でもあると思うのですが、やり方にこだわりはそこまでなくて、糸だろうが糸じゃなかろうが、なんでもいい。ただ、お蚕を飼うこと、養蚕は次の世代でもやってほしいなって思っています。

また、H氏は、縮小する国内の養蚕業を危惧すると同時に、蚕の種を保存するのではなく、産業の中で活かしていくことが重要だと話した。

[H氏] 小規模の今までの「養蚕農家」という農家の規模で生き残っていくことは、それはそれで可能だと思うんですけど、どんどん小さくなっていくでしょうし、それひとつだけだとゆくゆくは(蚕の)「保存」っていうところに行き着くと思うんですよ。それだと、僕は、強い言い方だと「失敗」に繋がると思っています。僕は、産業の中で養蚕、お蚕が活用されないと意味がないと思っているんですよ。「保存」じゃ物足りない。保存じゃ勿体無い。お蚕の魅力は「保存」じゃ効かない。使うことで、また次の新しいアイデアを組み入れていくような構造の中にお蚕を置いておきたいんですよ。そうやって多分 6,000 年前から来たと思うんですよ。染め・織物が栄えたりとか。

さらに、H氏は、数千年前から品種改良を通して家畜化した蚕の種を存続させていくことは、人間と蚕の間における「約束」だと感じていた。

[H氏] そういう、一緒にやっていくっていう約束を(蚕と)しているっていう気持ちも、最近思うようになってしまって。6,000 年前から人間と蚕は一緒に生活をしながら繭をとって、お蚕からしてみれば自分たちを育ててくれる人間をそばに置くという関係性が、約束みたいなものが、多分あったと思う。あったとしたら、

それを繋げていかないといけないのかなと思っています。

また、先述のように、供養は蚕に対する感謝や弔いの文脈で捉えられていたが、G氏（埼玉県 30代男性）は、養蚕という生業を継承させる行動こそが供養を意味すると考えていた。

[G氏] 俺の中での供養っていうのは「続ける」ということです。（略）もちろん、人それぞれの形があるから、これが悪いとか、もっとこうしろとは思いませんが、ただ、どれだけお寺に行って供養碑の前で拝んだとしても、続けるための行動をしていないと、それこそ形骸化になっちゃうんじゃないかな、と。つまり、苦しみをも引き継ぐような行動をしていかないと、あまり俺は「供養」だとは感じませんね。

このように蚕を育てる実践知を積み重ねてきた養蚕農家たちは、養蚕という人間と蚕の相互関係を通して、「個」としての蚕のみならず、人間が人為的に生み出した完全家畜である蚕の「種」としての生命をまなざしていた。

#### 4.4 伝統産業としての養蚕

これまで蚕に対する供養精神についてインタビューする中で、養蚕における「伝統」について言及する養蚕農家の姿があった。そこで、本節では数千年にわたって蚕を育て繭を生産してきた日本の養蚕業における伝統に対する養蚕農家の思いに焦点を当てる。

まず、家業として養蚕を続けているH氏（山梨県 30代男性）の場合、代々共通の思いとして、養蚕業自体を続けていきたい気持ちがあったのではないかと話した。

[H氏] おじいちゃんはおじいちゃんの、父は父の、私は私なりの、蚕に対する思いはあると思います。全体的に、H家という総称的なところでいうと、養蚕は続けていきたいという気持ちはあったのだと思います。（略）結局山梨県も果樹王国になりましたし、うちの近所の農家さんたちもみんな桑畑を全部果樹に変えているので、H家が要所要所のタイミングで養蚕をやめてもおかしくはなかったわけなんですよ。

でも、こうやって続けているっていうことは、それなりに養蚕に対する気持ちがあったんだと思います。果樹とか他の仕事をやりたくないっていう意味合いがあったかもしれないですけど、何くそ根性みたいな、我慢強いというか、一方で見れば、「バカだな」と思われているのかもしれないですけど、「なに儲けることのできない養蚕業やってるんだよ」と周りから言われていたかもしれないですけど、選択したんでしょうね、養蚕をやるっていうことを。時代は変われど、僕もその選択をしたんだと思います。

G氏（埼玉県 30代男性）は、家業の養蚕に対して、幼少期には特に強い印象を抱いていなかったが、養蚕について学ぶ中で養蚕に興味を持つと同時に、現在は養蚕を続けることに対する使命感を抱いていた。また、養蚕を営む自らの行為を振り返り、今後養蚕業のために何ができるかを省察しながら養蚕に従事していると話した。

[G氏] 多分、現状どうしたら残せるかっていうのは誰もわかっていないと思うんですよ。だって、それがわかっていたら多分こんな状況になっていないでしょう。今すぐにでも無くなりそうな状況じゃないですか。だから、何か一個でも引っ掛かればいいなと思って、できることはやっています。

B氏（群馬県 40 代女性）も、養蚕農家が減少していることに対する危機感を持ち、養蚕を次の世代に継承していきたいという思いを抱いており、学校を対象に養蚕の普及活動に取り組んでいる。

[B氏] どんどん減っているから、これを伝える存在としていたいなとは思うし、知らない人知ってもらいたいっていうのはすごくあるので。ワークショップをしたり、子どもに触れてもらいたいっていうのもあるので、学校のボランティアにも参加して。

このように、今日衰退する養蚕業の中で養蚕を営む若手養蚕農家たちは、これまで数千年にわたって継承されてきた伝統産業である養蚕を続けることに対して強い使命感を抱いていた。同時に、養蚕を営む自らの行為を振り返り、今後養蚕業に対して自分は何ができるかを省察する姿も見られることから、若手養蚕農家は主体的に養蚕という生業をまなざしていることがわかる。

また、若手養蚕農家たちの中には、これまで農業の領域で展開されてきた養蚕における伝統の真意を問いながら、どのような形で伝統を継承するかを考える姿があった。具体的に、C氏（群馬県 30 代男性）は機械的に蚕を大量飼育する工業型養蚕に対して違和感を抱き、これまで続いてきた農業としての伝統的な養蚕に魅力を感じると同時に、「伝統」の真意について考えを深めながら現代における養蚕のあり方を模索している。

[C氏] 産業として持続する形を作るには…。そういう面では、形はいいかなとは思んですけど、なんか、ちょっとなあって（笑）（略）でも、魅力を感じるんですけど、伝統って言われるところの本物さっていうか、オーセンティックか、みたいな。（略）伝統とは言いながらも、あまりにもクラシック過ぎるとやりたいって人も出てこなくなっちゃうし。できるところは省力化しながら。

代々養蚕業を営む G氏は、「伝統」について、大切なものを残すための思考自体が「伝統」なのではないかと考えていた。

[G氏] 伝統って考えも、結局続いてきたから伝統であって。それに、養蚕が伝統っていうより、何かを残すために続けるための思考力が伝統だと思っています。（略）だから、養蚕を残すというより、養蚕を通して何か物事を残したり続けたりすることを考えることが大切で。現状養蚕は続いているから伝統的なものとして捉えられているだけなんじゃないかな。結局養蚕も形だと思っんですけど。

さらに、養蚕を続けることの意義について問うと、G氏はこれまで絶えず養蚕を続けてきた人たちに対する思いがあるという。

[G氏] さっき話したように、「手をつけてしまった以上は」っていうのがマナーになると思うんですけどね。日本では、紀元前何年かわからないですけど、日本人は養蚕に手をつけたわけじゃないですか。それで、そこから絶えず今まで続いてきているわけですよ。確かに、いろんな判断をする中で「辞める」って決断をするんですけど、辞めることはいつでもできるんですよ。でも、「続ける」ってことは、続けることでしか続けられないんですよ。これを辞めちゃうって、それこそ今まで続けてきた人に対してもどうなのかなって。（略）それこそ、行動で示したいです。養蚕を通して関わった人たちとの繋がりも含めて、知ってしまっ

た以上は投げ出せないという感じですね。俺なりの勝手な解釈ですけど、託されたものもあってして。それを全うできればいいかなと思っています。

このように、ことに若手養蚕農家は次世代に養蚕を継承していきたいという強い意欲を見せていた。同時に、彼らは養蚕の「伝統」を見つめ、それが内包する歴史を振り返るとともに、この伝統が意味するものとは何かを主体的に捉えているのである。

## 5 分析・考察——養蚕農家の供養精神

本章では、前章で記した養蚕農家に対するインタビュー結果を踏まえ、本研究のテーマである蚕への供養という吊いの精神に着目し、分析・考察を行う。まず、「5.1 養蚕と供養——供養という共同的信仰」では、蚕に対する養蚕農家の供養精神に注目し、いかにしてそうした精神が養蚕農家の地域共同体の中で醸成されてきたのかを分析・考察する。続く「5.2 主体化する養蚕農家——変化する供養のあり方」においては、養蚕組合の解体とともに養蚕農家個人が主体的に養蚕業を営まざるを得なくなる中で、これまで養蚕農家による共同体の中で形成されてきた供養精神の主体がいかにして養蚕農家個人へと変化してきたのかを記す。最後に、「5.3 『継承』という供養精神——人間と蚕の相互関係」では、今日における養蚕農家の蚕に対する供養精神を通して、人間の手を介さねば生きられない完全家畜の蚕という「種」と向き合い、養蚕の継承に向けて取り組む養蚕農家の語りから、彼らの蚕への想いや人間と蚕の関係について考察・分析する。

### 5.1 養蚕と供養——供養という共同的信仰

本研究では、蚕の殺生に対する養蚕農家の供養精神に着目したインタビューを実施したが、養蚕農家たちはそれぞれ蚕の殺生に対してさまざまな想いを抱いており、蚕の殺生に対する違和感や罪悪感を述べる養蚕農家の姿があった。具体的に、「4.2 養蚕における供養」の中でB氏（群馬県40代女性）は、当初蚕の殺生を伴う養蚕を始めることを躊躇していたが、蚕の生命が循環するイメージを持つことで蚕の死を乗り越えようとしていた。

また、蚕の死に対する「謝罪」のみならず、蚕の生命のうえて養蚕業の経済活動が成り立つことへの「感謝」を述べる養蚕農家の姿もあった。例えば、A氏（群馬県70代女性）は、養蚕が終わる時期に蚕に対して感謝の気持ちを伝えると話した。また、G氏（埼玉県30代男性）は、供養精神について、蚕への「お礼」と「謝罪」という「感謝」の2つの側面について言及していた。また、B氏やD氏（埼玉県80代女性）、H氏（山梨県30代男性）も、蚕が無事に育ち繭を生産できたことに対する蚕への感謝の気持ちを述べており、蚕期の初めや終わりに、神社などで養蚕が無事行えたことに対する感謝を伝えていた。

このように養蚕業において「供養」という精神には生き物の死に対する罪悪感のみならず、感謝の気持ちも内包されている。そして、こうした精神的営為は「2.3 養蚕における吊い——養蚕信仰の諸相」で述べたように、養蚕農家の間で「養蚕信仰」という形で体现されてきた。養蚕は短期間に多額の現金収入をもたらす重要な生業であったが、当たり外れが甚だしい生業でもあり、農家の現金収入の大部分を占めているため、2～3年連続で違蚕したために破産し夜逃げをするに至った事例も見られる。それゆえ、蚕の安全や豊作を祈願し、外敵から防護するために養蚕の盛んな地方ではほとんどの屋敷ごとに蚕神が祀られ、家の氏神様として奉祀することもあった（飯館村史

編纂委員会編, 1976, p.219, 223)。すなわち、天候やネズミといった外敵などの影響を受けやすく、人間の意図する通りに飼育することが困難な蚕という生き物を扱う養蚕農家にとって、養蚕信仰という祈りを通して自らの生業の成功を祈願しているのである。

また、「4.2 養蚕における供養」の中でE氏（埼玉県60代男性）が言及していたように、養蚕農家が集まり小正月の行事として繭玉を作るなど、養蚕農家が執り行う年中行事の中にも養蚕信仰が見られる。福島県における養蚕信仰について研究した村川友彦によると、年中行事は毎年同じ日やその前後に繰り返される行事で暦によって決められ行われるものであり、作物の生育や収穫など毎年繰り返される周期的な出来事に合わせた行事や信仰的儀礼などから自然に発生したものだと考えられている。養蚕の年中行事についても毎年行われており、病気を除き多くの収穫を期待することから、あらかじめ祝う行事や収穫を祝う行事がある（村川, 2004, p.55）。また、養蚕に関する信仰は、神話に基づく稚産靈売命、保食神などといった神、仏教と結びついた馬頭観音、馬鳴菩薩などや、神仏習合による思想に基づく金色姫や衣襲明神、民間信仰のオシラサマ信仰と関係があるものなどを蚕神とし、かicola様、コジラ様などとも呼ばれている地域もあり、多様な信仰の形があった。また、神社や寺院からのお礼などを蚕の守り神として家に祀り、これを蚕神として祭事を行い、養蚕の安全と繭の豊作を祈った（村川, 2004, p.65）。このように、各地域の風土や慣習の中で多様な養蚕信仰が形成されてきたのである。

こうした信仰は、養蚕農家たちの共同体を基盤に醸成されてきた。例えば、養蚕団体史編さん事務局によると、日本の農村において形成された養蚕農家の集団について、経済的便宜の観点から自然発生的なものとして「講」の存在があげられる。当初講は親類縁者の神仏信仰と親睦の集団であったが、後に近隣の同志が加わり、その中で養蚕講や蚕影講、蚕神講、おしら講といった養蚕守護の神仏を信仰する集団は、養蚕農家の同士の集まりであったため、比較的養蚕組合に変化しやすかった。実際に、大槻正芳著『農村社会の実態』（甲陽書房、1958年出版）（大槻, 1958）に記載されている長野県上伊那郡の部落における事例として、江戸時代に起源を持つ養蚕農家の集団である蚕玉講が存在したが、1873（明治6）年に南信地方で「地方生糸改会社」が設立され、輸出生糸の粗製濫造を避けるため、上伊那郡で蚕糸業組合を作り、その下部組織として多数の養蚕小組を作った際に、この蚕玉講がそのまま養蚕小組となったという事例があげられている（養蚕団体史編さん事務局編, 1964, p.42-43）。すなわち、日本の近代化に伴って講といった養蚕農家の小規模な集団から養蚕組合へと組織化される中で、養蚕信仰の主体であった養蚕農家の共同体は蚕糸業を支える産業基盤としての地域共同体へと変化していったのである。

インタビューの中でも、D氏やE氏は、同じ地域の中で養蚕農家が集まって祭りに参加したり旅行をしたりすると話していた。また、実際に蚕の供養のために養蚕農家たちが一緒に蚕の供養に関する祭祀に参加することもあると述べていた。このように、蚕に対する感謝やその死に対する弔いの精神を内包する「供養」という精神的営為は、生き物である蚕を育てる実践的営みから立ち現れていると同時に、養蚕信仰という形で養蚕農家の共同体を基盤に醸成されてきたのである。

## 5.2 主体化する養蚕農家——変化する供養のあり方

前節で述べたように、近代化に伴って養蚕業が興隆し、養蚕農家を取り巻く組織体制が変化する中で、養蚕農家の蚕に対する供養精神の質的变化が見られるようになった。インタビューを通して、養蚕農家たちは蚕の殺生に対して違和感や罪悪感を抱いていたが、同時に、それぞれが養蚕を通して蚕に向き合いながら、蚕に対する感謝について言及していた。

供養碑や供養塔の建立などを通して生き物への弔いの精神を体現してきた歴史は、生き物の殺生を伴う産業が興

隆していった近代以降に見られるという指摘がある。具体的に、供養精神は狩猟、稲作農業、漁業や養蚕業など生類の生命を奪うことで成り立っている生業と密接に関わっており、産業の近代化に伴い、供養の精神がより一層強化されてきた（長野，2015，p.223-224）。また、動物に対する供養や慰霊に関する調査を実施した依田賢太郎によると、明治維新の欧米化政策による殖産興業の振興によって動物が資源化され、各種用途別の業種に分けられた結果として、慰霊や供養の対象となる動物の種と量が拡大するとともに、慰霊や供養を行う主体が、従来の講中や社中、村落有志などから業界などの団体へと質的転換が起こった。例えば、食肉用動物の場合、畜産業者や食肉加工業者、食肉販売業者、調理師会、獣医師会などが主体となり、慰霊や供養を実施した（依田，2018，p.36-37）。また、動物慰霊碑や供養碑を建立した背景として、畜産や食肉、実験や愛玩などといった動物の資源化や商品化が急速に進展したことによる動物を殺すことに対する心の痛みやうしろめたさが存在し、そうした精神の処理が動物の慰霊や供養と結びついていったと依田は述べている（依田，2018，p.15）。昭和以降は、研究開発の活性化に伴い、大学や製薬企業などで実験動物慰霊碑が多数建立されるようになる。例えば、魚の養殖や家畜の育種といった動物の生命操作が盛んとなったことにより、研究や生産過程で死滅する動物を慰霊するために碑が建立された（依田，2018，p.38-39）。さらに、生き物の殺生に対する罪悪感だけでなく、生を絶たれる多数の動物の命への関心を示す碑文が次第に増加していることから、殺生罪業観の呪縛から解放されると同時に、生命に対する洞察が深化し、犠牲となった命や生前の貢献への感謝の気持ちが強まったと依田は考察している（依田，2018，p.39）。このように、生き物の殺生を伴う生業の産業化に伴って、供養の様相は変化してきたのである。

養蚕業においても、供養の主体に関して変化が見られる。D氏（埼玉県 80代女性）は1975（昭和50）年頃に年間1トンの繭を生産しており、F氏（埼玉県 60代男性）も繭の収量が直接的に収入になっていたと話していたように、その当時の養蚕業は現在に比べると活気のある産業であった。また、F氏が地域内の蚕糸関連施設の中に蚕の供養塔があったと述べていたように、蚕の大量飼育が養蚕農家の生計を支えていた時代では、地域や蚕糸に関連する組織が主体となって蚕の供養碑や供養塔を建立していた。このように、蚕糸業の産業化に伴って生産者が一丸となり、蚕に対する供養精神を体現してきたのである。

一方で、近年全国的な養蚕農家数の減少に伴って、養蚕組合をはじめとした蚕糸業関連組織が解体されていく中で、徐々に供養精神に関する取り組みや行事は見られなくなっていった。養蚕業から他業種への転換に関して経済の視点から調査を行った小野直達によると、これまで養蚕は主に平地農村や農山村地帯を中心に、畑作地域における換金作物の一つとして農業経営上重要な地位を占め、農家経済および地域経済に大きく寄与してきた。また、養蚕部門は養蚕複合経営としての副次的な地位にあり、都市化や工業化などの影響を受けながら、養蚕の地域的後退、産地の低迷といった町村自体の喪失に繋がった。さらに、1950年代後半から1960年代後半までの水田作の進展と、畑作部門における野菜や果樹、施設園芸などの資本・労働集約的商品作目の進出に伴って、養蚕地帯は周縁に追いやられ、後退していった（小野，1996，p.1-2）。このように養蚕業全体が縮小していくとともに、養蚕業を構成する養蚕組合という組織体の変化が見られる。これまで養蚕組合は、①蚕種や繭の取引先の決定、②蚕種や生産資材の共同購入、③繭の集出荷、④繭の販売などの機能を持ち、農協によっては稚蚕共同飼育所における稚蚕管理や買桑、遊休桑園の斡旋などの機能も有していた。このような機能を果たす養蚕組合は、大規模養蚕農家にとっては生命線とも言えるが、地域における養蚕農家の減少は、養蚕組合員数の減少に繋がる（小野，1996，p.159）。すなわち、国内の蚕糸業は、都市化や工業化といった変化に伴い、産業規模を縮小せざるを得ない状況へと追い込まれていったのである。

こうした養蚕業自体が衰退していく時代背景を踏まえると、本インタビューにおいて調査対象者の世代間の違いが見られる。例えば、「4.1 養蚕という営み」の中でF氏は「労働力として家に入った」と話していたように、養

蚕で生計を成り立たせるという基盤が現在より安定した環境の中で養蚕業に従事していたが、同じく実家が養蚕を営んでいる G 氏（埼玉県 30 代男性）や H 氏（山梨県 30 代男性）の場合、養蚕だけで生計を立てることが難しい時代背景の中で養蚕業に従事することとなった。具体的に、2011（平成 23）年より養蚕業に従事し始めた G 氏の世代では、すでに養蚕農家数は約 600 戸、繭の生産量は約 200 トンほどであり（一般財団法人日本蚕糸会，2023）、年々産業規模が縮小していった時期であった。すなわち、多くの養蚕農家が存在していた時代では全国各地で養蚕組合が組織され、養蚕業の産業基盤が安定していたが、養蚕農家数の減少に伴い養蚕組合といった組織が解体されていったことで、養蚕農家は個人として主体的に養蚕を捉え、自力で自営せざるを得ない状況となっていったのである。

養蚕業における変化の中で、今日の蚕に対する供養精神について、ことに 30 代・40 代の若手養蚕農家たちは、それぞれ自らの「殺生」や「供養」に対する考えをより明確にしようとしていた。例えば、G 氏は養蚕自体を振り返り、養蚕は蚕の生命の循環の一部を切り取ることで成り立つ生業であるゆえ、蚕に対する感謝と謝罪の両方を含めた感情が供養であると考えていた。また、H 氏は、祈ることで自らの養蚕技術を振り返るとともに、今後の養蚕に対する自らのプレッシャーを高めていた。このように、養蚕という生業や歴史を俯瞰して捉え、なぜ自分が養蚕を続ける必要があるのかを問いながら、養蚕という生業に意義を見出そうとする若手養蚕農家の姿があった。

養蚕組合をはじめとした組織が一丸となって大量に蚕を飼育し生計を立てる時代から、そうした組織が解体されるとともに養蚕だけでは経済的に厳しい状況へと移り変わる中で、養蚕農家たちは自明であった養蚕業のあり方を主体的に省察するようになっていった。さらに、これまで養蚕組合といった地域共同体が中心となり祭祀や儀礼、供養塔や供養碑の建立といった形で体現されてきた蚕に対する供養のあり方が変化し、養蚕組合の解体によって養蚕農家個人の主体性が強まり、蚕の殺生や供養に対して直接的にまなざすようになっていったのである。

### 5.3 「継承」という供養精神——人間と蚕の相互関係

これまで地域共同体の中で醸成されてきた供養精神について、組織の解体を伴いながら供養の主体が個人へと変化してきたが、今日における養蚕農家の蚕に対する供養精神とはどのようなものなのだろうか。まず、養蚕農家の中には、自ら育てた蚕が繭となり、その後蛹の段階で死んでしまうことに対して抵抗感を抱く姿があった。例えば、C 氏（群馬県 30 代男性）は「4.2 養蚕における供養」の中で人為的に殺生せざるを得ない蚕に対する罪悪感を述べ、G 氏（埼玉県 30 代男性）も蚕の死について落とし所が見つからないと話していた。

他方、蚕という生き物の殺生と向き合いながらも、人為的に蚕の種を改変し、結果として人間の手を介さねば生きられなくなった完全家畜の蚕という「種」全体をまなざす養蚕農家の姿もあった。例えば、F 氏（埼玉県 60 代男性）は「4.3 養蚕の継承への想い」の中で、人間は蚕から生糸を一方的に得ているのではなく、蚕の世話を通して蚕の種を継承させているという人間と蚕の相互関係について言及していた。また、G 氏はこれまで養蚕が数千年にわたって絶えず続いてきたことに意義を見出しながら、蚕の生命を直接的に扱う養蚕という生業を始めた以上は養蚕を続けていくことが殺生を免れ得ない蚕に対する礼儀であると考えていた。H 氏（山梨県 30 代男性）も、数千年前から続いてきた養蚕の歴史に目を向け、蚕という種を次世代へ繋げていきたい気持ちが強いと同時に、単にその種を保存するのではなく、産業の中で蚕の生命が活かされる形で養蚕を続けていくことの重要性を述べていた。すなわち、蚕を育てる実践知を積み重ねてきた養蚕農家たちは、養蚕という人間と蚕の相互関係を通して、蚕の「個」における生命のあり方ではなく、蚕という人間が人為的に生み出してきた「種」としての集合的生命そのものを捉えているのである。

同時に、これまで継承されてきた農業としての伝統的な養蚕を振り返り、現代における養蚕の伝統について再解釈しようとする若手養蚕農家の姿もあった。具体的に、C氏は「4.4 伝統産業としての養蚕」の中で、これまで継承されてきた農業としての伝統的な養蚕を振り返り、現代に融合する形で養蚕における伝統のあり方を再解釈しようとしていた。また、G氏は、養蚕というのは形でしかなく、伝統の本質とは大切なものを残すための思考を意味すると考え、だからこそ養蚕を通して大切なものを残そうと考えることが重要であると述べていた。このように、養蚕農家たちは、養蚕という人間と蚕の関係の中で培われてきた伝統が内包する意義を省察し、養蚕という生業を意味付け、再定義しようとしているのである。

上記の養蚕農家たちの語りから、完全家畜である蚕の種を持続するためには養蚕という生業を次世代に継承する必要があると同時に、養蚕を継続するためには蚕を殺生せざるを得ないという人間と蚕との絶対的な相互関係が存在することが明らかとなった。こうした蚕との有機的な生業を継承してきた養蚕農家たちは、蚕への供養精神を通して数千年にわたって続いてきた蚕の生命と向き合いながら、自らと蚕の関係を省察し、その生命を未来へ継承する意志を固めてきたのではないだろうか。

養蚕の継承は、これまで人間の手を介して品種改良されてきた蚕の生命の継承をも意味する。だからこそ、養蚕における実践知から立ち現れる蚕への感謝や尊敬の念、蚕の死への罪悪感を内包する供養という多層的な精神を持つことによって、伝統産業としての養蚕を次世代へ継承していったのではないだろうか。すなわち、養蚕という伝統的生業から立ち現れる「供養」とは、蚕の死に対する弔いの精神のみならず、過去から未来へと蚕の生命を継承していく駆動力としての精神的営為でもあるのだ。

## 6 結び——供養を通して再考する人間と蚕の関係

本稿では、文化人類学における人間と動物の関係の再考に向け、マルチスピーシーズ民族誌という多種をまなざす分析枠組みを踏まえるとともに、人間の他種に対する認識を明確にするべく、動物の殺生を通して立ち現れる「供養」という生産者の精神に着眼した。ことに、日本において2,000年以上にわたって培われてきた人間と蚕が生み出す生業・養蚕業において、蚕を育てる養蚕農家の間で醸成されてきた供養という精神的営為に注目した。これまで養蚕農家たちは養蚕という生業を通して、繭の豊作や除災、蚕への弔いの精神を日常生活の中で体現してきた。しかし、その後国内における養蚕業の規模が縮小し、今日では養蚕農家の高齢化や後継者不足などによって養蚕業自体の存続が危ぶまれている。さらに、近年スマート養蚕システムという無菌工場で大量の蚕を飼育する動きが加速しており、こうした工業型養蚕は今後人間と蚕の関係における質的転換をもたらし得る。

本研究では、関東甲信越地方の8名の養蚕農家を対象にインタビューを実施し、彼らの供養精神の実態について調査を行った。養蚕農家たちは、蚕の存在によって自らの生計が成り立つことに対する感謝の気持ちを抱き、供養に関する祭祀および行事への参加や祈りを通してその気持ちを日常生活の中で体現してきた。同時に、蚕の死に対する罪悪感と向き合い、供養を通して折り合いをつけようとする姿も見られた。

また、そうした蚕の死について、「個」としてではなく、これまで人為的な品種改良を通して完全家畜となった蚕の「種」全体をまなざし、その種を継承することに意義を見出す養蚕農家も存在した。すなわち、彼らがまなざすのは、蚕の殺生を伴って展開されながらも、蚕の種を継承してきた養蚕という有機的な生業の歴史、そして人間と蚕の相互関係そのものであった。同時に、この関係は、「供養」という養蚕農家の蚕に対する省察から立ち現れる関係であるとともに、供養という人間の精神は人間社会の中で蚕の生命を継承していくという、種としての蚕の次なる「生」をまなざす営為でもあるのだ。

こうした供養精神は、人間が一方的に他種の殺生を肯定するための免罪符として捉えられ、「人間中心的」な思考であるとも言えるだろう。しかし、人間は生き物の殺生なしには生きられず、あらゆる生命との相互関係のうえで私たち人間の生命は連綿と継承されてきたという事実は依然として存在する。だからこそ、これまでの人間中心主義的思考や、現在文化人類学においても盛んに議論されている脱人間中心主義の議論について踏まえたうえで、人間と他種間の相互関係の実態を捉えていく必要がある。そして、非人間である他種に対する感謝や慰霊を内包する供養精神に着目し、現地におけるフィールドワークを通して、いかにして他種の主体性が立ち現れ、人間と他種の関係が生成されるのかを精緻に調査することで、今後のマルチスピーシーズ民族誌の議論を展開していけるはずだ。

人間と蚕の相互関係を通して養蚕という生業を継承してきた養蚕農家たちは、その生業が内包する人間と蚕の有機的な関係を省察すると同時に、両者の関係における「持続可能性」と向き合ってきた。すなわち、養蚕農家という生産者の供養精神は、生き物の死をまなざす弔いの精神のみならず、自らを省察しながら未来をまなざす精神的営為であると同時に、人間と蚕の相互関係は、「供養」という養蚕農家の省察的思考と行為を通して構築されている。時代を超えて脈々と受け継がれてきた供養の歴史と、その現実に向き合い続ける生産者の語りに焦点を当てた研究を蓄積することによって、現代における人間と他種の関係の再考および再構築へと繋がるはずだ。

<sup>1</sup> 一般財団法人大日本蚕糸会によると、2022（令和4）年における養蚕農家数は日本全国で163戸であり、そのうち年間で群馬県は59戸、埼玉県は11戸、山梨県は1戸である。また、繭生産量は日本全国で51トンであり、そのうち群馬県は約18,000kg、埼玉県は約3,000kg、山梨県は約158kgであった（一般財団法人大日本蚕糸会、2023）。

## 参考文献

### 【論文・書籍】

- Tsing, Anna Lowenhaupt. (2015). *The Mushroom at the End of the World: On the Possibility of Life in Capitalist Ruins*. Princeton University Press.
- Blanchette, Alex. (2015). Herding Species: Biosecurity, Posthuman Labor, and the American Industrial Pig. *Cultural Anthropology*, 30(4), <https://doi.org/10.14506/ca30.4.09>.
- 麻生由布・田中幸悦 (2019) 「特集『蚕業革命:カイコが拓く新産業』スマート養蚕技術の研究開発」『蚕糸・昆虫バイオテック』88巻3号、181-185頁。
- 飯館村史編纂委員会編 (1976) 『飯館村史 第3巻 (民俗)』飯館村。
- 大槻正芳 (1958) 『農村社会の実態』甲陽書房。
- 奥野克巳 (2021) 「【特集】 マルチスピーシーズ民族誌の眺望——多種の絡まり合いから見る世界」『文化人類学』86巻1号、44-56頁。
- 小野直達 (1996) 『現代蚕糸業と養蚕経営——日本養蚕は生き残れるか』農林統計協会。
- 久保明教・近藤社秋 (2022) 「【対談】『人間しかないわけではない世界』の人類学」『思想 2022年10月号』(1182)、岩波書店、27-48頁。
- 小泉勝夫 (2015) 『カイコの豆博士 (改訂版)』シルクミュージアムショップアソシエーション。
- 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 (農研機構) 企画戦略本部新技術対策課 (2008) 『カイコってすごい虫!』農業・食品産業技術総合研究機構 (農研機構) 企画戦略本部新技術対策課。
- 近藤社秋・吉田真理子 (2021) 「序章 人間以上の世界から『食』を考える」、近藤社秋・吉田真理子編『食う、食われる、食いあう マルチスピーシーズ民族誌の思考』青土社、9-65頁。
- 財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所 (2010) 『養蚕』財団法人大日本蚕糸会蚕業技術研究所 (原著: 文部科学省『養蚕 農業』445、『養蚕 高農』10-1044、実教出版株式会社)。
- 阪本英一 (2008) 『養蠶の神々——蚕神信仰の民俗』群馬県文化事業振興会。
- 周啓乾 (1989) 『東アジアのなかの日本歴史7 明治の経済発展と中国』六興出版。
- シンジルト (2011) 「第4章 幸運を呼び寄せる——セテルにみる人畜関係の論理」奥野克巳編『人と動物、駆け引きの民族誌』はる書房、131-165頁。
- 床呂郁哉 (2011) 「第3章 『もの』の御し難さ 養殖真珠をめぐる新たな『ひと／もの』論」、床呂郁哉・河合香史編『もの人類学』京都大学学術出版会。
- 富岡製糸場世界遺産伝道師協会 (2019) 『群馬の蚕神めぐり——蚕の神々を訪ねる』富岡製糸場世界遺産伝道師協会。
- 長野浩典 (2015) 『生類供養と日本人』弦書房。
- 村川友彦 (2004) 『歴春ふくしま文庫31 蚕と絹の民俗』歴史春秋社。
- 山田仁史 (2016) 「第5章 コメント①」野田研一・奥野克巳編『鳥と人間をめぐる思考——環境文学と人類学の対話』勉誠出版、125-131頁。
- 養蚕団体史編さん事務局編 (1964) 『養蚕団体史』全国養蚕農業協同組合連合会。
- 依田賢太郎 (2018) 『いきものをとむらう歴史——供養・慰霊の動物塚を巡る』社会評論社。

### 【データベース】

一般財団法人大日本蚕糸会 (2023) 「国内蚕糸統計データ (2023年10月1日更新)」、(2023年10月29日取得、<https://silk.or.jp/publications/#link02>)。

### 【インターネット資料】

- 岡谷市観光協会 (2023) 「⑧ 蚕糸供養塔 (照光寺)」、(2023年10月29日取得、<https://www.kanko-okaya.jp/enjoy/heritage/%e8%9a%95%e9%9c%8a%e4%be%9b%e9%a4%8a%e5%a1%94%ef%bc%88%e7%85%a7%e5%85%89%e5%af%ba%ef%bc%89-2/>)。
- 株式会社あつまるホールディングス (2023) 「周年無菌養蚕」、(2023年10月29日取得、<https://atsumaru-silk.jp/sterilized.html>)。
- 高崎市文化財保護課 (2023) 「柏木沢の蚕影碑」、(2023年10月29日取得、<https://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2013121700979/>)。
- 農林水産省 (2023) 「蚕糸業をめぐる事情 (令和5年9月)」、(2023年10月29日取得、<https://www.maff.go.jp/j/seisan/tokusan/attach/pdf/sannshi-4.pdf>)。
- ユナイテッドシルク株式会社 (2023) 「Technology」、(2023年10月29日取得、<https://united-silk.co.jp/technology/>)。
- 米沢市企画調整部秘書広報課 (2023) 「草木塔」、(2023年10月29日取得、<https://www.city.yonezawa.yamagata.jp/1769.html>)。